

モレキュラー・シアター演劇公演

カフカの城(秘書たち)

—フランツ・カフカ「ミレナへの手紙」(辻理訳・新潮社刊)に基づく新作公演—

1990年3月10日(土)

午後1時30分開場 / 2時開演(上演時間約90分)
埼玉県立近代美術館地下一般展示室 / 先着300名 / 入場無料

埼玉県立近代美術館

埼玉県浦和市常盤9-30-1 電話048-824-0111
JR京浜東北線北浦和駅西口・北浦和公園内



不安の他には……

ここには誰一人としていないのだよ



スタッフおよびキャスト

作・演出：豊島重之
振付・主演：大久保一恵
出演：服部明子、平井美智代、坂下智恵美、清川理恵、
高沢利栄、早川英詩子、相馬寿、荒谷勝彦
舞台監督：荒谷勝彦
照明：奥正正規
音響：梅田健治（一部、根本忍作品を使用）
装置：戸田昌征、山崎淳、米内晃、奥山隆俊
制作：豊島和子

モレキュラー・シアター活動歴

- 1986 「f/Fバラサイト」(カフカ「フェリーツェへの手紙」による)初演/於 東京・T2スタジオ
1987 「f/Fバラサイト」西独・ベルギー公演/於
ベルリン「ベタニエン芸術家会館」、ヒルゼン
「アルデンピーゼン城(フレミッシュ文化センター)」、
ミュンスター「ブンペンハウス劇場」、
京都「無門館」、名古屋「七つ寺共同スタジオ」、
高松「ウィング」
1988 「f/Fバラサイト・Bヴァージョン」/於 東京・
ドイツ文化会館(ベルリン750年祭記念「ベタニ
エン・アーベント・フェスティバル」参加)
1989 「国際カフカ・フェスティバル」共同主催/「f/
Fバラサイト」「B・トーキー(カフカ「穴巢」
より)」上演 於 WALK八戸・パラボラ、
「f/Fバラサイト」チェコ・イタリア・西独公演/於
プラハ「カフカ演劇祭(ジュニア・クラ
ブ劇場)」、パレルモ国際演劇祭(テアトロ・リベ
ロ劇場)、ミュンスター「テアター・クルトウ
ール演劇祭」(ブンペンハウス劇場)

評

宇野邦一 (仏文学者)

——豊島重之の演出は、このようなカフカのシステムの動脈を抽出した。カフカの手紙がドラマになったのではなく、手紙というカフカの舞台の、カフカの演出、カフカの俳優たちの対決が、直接抽出されたのである。(1988.12.図書新聞)

ミヒャエル・ヘルター (ベルリン・ベタニエン館長)

——モレキュラー・シアターは、シンボル力の強烈な描写と場の設定を、観る者を釘づけにするサイコドラマに濃縮し、日本語を解し得ぬ者をもその魅力の虜としてしまった。

太田省吾 (劇作家・演出家)

——大久保一恵さんの演技、その深みのある動きはこの舞台には欠かせないものだと思います。われわれは、彼女の深い目にさそわれて、屋根裏部屋へ足を踏み入れていったのでした。

オンドリエイ・フラーブ (プラハ・演劇批評)

——日本からのモレキュラー・シアターはカフカ理解のためのもうひとつのドアを開けてくれた。その芸術的完成度のもとより、多くの問題を喚起してくれたこの演劇は、我々の心の中にあるもうひとつの境界を見事に打ち破ってくれたと言ってよい。(1989.7)

あらすじ

測量技師K.は、雪深い村に到着する。

そこは「城」の管制下にあった。あやふやな電話や、私信同然の公文書や、村人たちの妄信に近い噂など。K.は村に留まるべく、城との奇妙な戦いを強いられることになる。

そこにさまざまな男女が介在する。使者、助手、村長、教師、そして城の下級官僚と覚しき「秘書たち」——ソルディーニ、ソルティーニ、モームス、エルランガー、ビュルゲル、強権をもつかにみえたクラムさえ、せいぜいが中級官僚どまりらしい。

何よりも女たち。K.を助け、あるいは苦境に立たせてしまう「城の娘たち」——フリーダ、オルガ、アマリア、ガルディーナ、ペービー……。

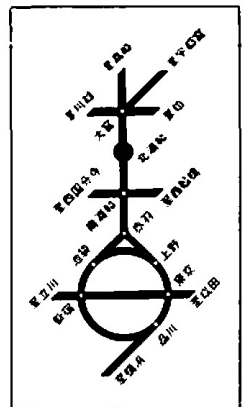
かいせつ

本公演は、青森八戸市で独自の活動を展開する一方、ヨーロッパ各地で多くの公演活動を行っているモレキュラー・シアターの、初の埼玉公演である。カフカの「フェリーツェへの手紙」に魅入られ、結成当初より困難な演劇化を試みてきたが、その解釈の特異さは、昨年プラハで行われたカフカ国際演劇祭でも大きなセンセーションを巻き起こしたほどだ。

本作品「カフカの城(秘書たち)」は、カフカがフェリーツェの次に送り続けた「ミレナへの手紙」に基づく、同劇団の第2作目であり、国内ではこれが初の上演となる。

場面は、カフカの長編小説「城」のストーリーによって展開してゆくが、セリフはあくまでカフカが死の直前まで送り続けた、恋人ミレナへの手紙のモノログで語られてゆく。それは、象徴化された小説の形式のなかに、私信で綴られる生々しい感情を鋭く突きつけることで、死の影迫るカフカの全体像をいっそう深く掘り下げようとするかのようだ。

事実、ミレナへの手紙は、ちょうど「城」を執筆していた時期に最も盛んに書かれており、その数は2年たらずの間に300通にもものぼったと言われる。その意味で、1910年代のカフカがフェリーツェへの手紙を培地に「変身」「判決」「審判」などを生み出したとすれば、1920年代のカフカは、ミレナへの手紙を培地にこの長編小説「城」を発酵させたと言っても過言ではない。



埼玉県立近代美術館

埼玉県浦和市常盤9-30-1 電話048-824-0111

JR京浜東北線北浦和駅西口・北浦和公園内

同時開催「香月泰男<シベリア・シリーズ>展」

3月28日まで 観覧料：一般720円/大高生510円/中小生300円